

Nさん 東邦重機開発（株）（東京都）

建設現場では、さまざまな機械が稼動する。建設資材などを揚重運搬する重機の運転が新妻さんの仕事だ。この仕事に入ったのは昭和43年。26歳のときである。

「それまでタイル屋にいたので、現場のことはある程度知っていました。いつしか重機に興味をもち、やってみたいと思っていました」。転身のきっかけだった。現在、主に運転しているのは、ラフタークレーンという移動式の重機だ。無限軌道がついたクローラークレーンと違って、機動力に富むのが特徴。しかも公道を走れるので、クレーンだけでなく大型特殊免許も必要になる。

自在に操れるようになり、「やっていける自信がついたのは、10年くらい経ってからでした」。その自信を「肩が凝らなくなったのは」という表現で、にこやかに話すところに人柄が覗く。それまではかなり「肩が凝った」らしい。



穏やかな表情の中に自信が
のぞく

揺さぜずに、ピンポイントで所定の場所に置くテクニックなど、高度な技能の裏打ちがあって初めて成り立つ世界だ。

建設マスターの称号を機に、「やってはいけないことは、絶対にやるな」と初心に帰って忙しい日々を送る。

自信がつくにつれて「回りの人たちの安全に気配りする」心のゆとりが生まれてきた。これまで30数年、無事故・無災害を続けている。その秘訣は「玉掛けをはじめ相手の職人さんたちのペースに合わせて、正確・安全を最優先すること、そして時には自分を抑えること」にあるようだ。

この信念は、後進の指導・育成でも貫いてきた。「今の若い世代は、機械のことは結構知っていますから、技術面以上に『回りをよく注意するように』と徹底する。

この30数年、ものすごい進歩を遂げた建設機械を見てきた証人の一人。それは「昔はカン（勘）ピューターでしたが、今はコンピューターの時代ですから」というほど高度なものになってきた。それでも、強風下で資材を動